開化自慢滑稽笑抱會議

井上久太郎著

上

A 789
1

滑稽笑抱會議

積善堂
贈書

滑稽笑抱會議初編序

陽和を春を百花開き百鳥囀て吸酒
をひくもの吸つ知つきて来春城動くを
続て開きて彩雲開き居びき見
ひく久といふ言の俗語い塔の古家
とよして神代の玉の天のいと戸は
云ふ事しよりは国土元来無ひきと今

45-8525

開化連集會之圖

肥田武大郎

名真神黨文

花本志庵

今橋持丸

江殿野良吉

鋤蓑卯四郎

刀工 田中忠治

文明手ひらくる時勢萬般よろづ新奇
眉から飛び出す奇々出来合の屏ぶ
咲や此開化の爛漫の大あくびを
運のひらくを序ぶんとなす者

開化堂主人誌

草案

開化自慢 滑稽笑抱含儀 上

井上久太郎 著

高き屋にのぼりて見れバの御製ハ今日の繁昌と未然にさとし給ふがごとく咲やこの花の栄華ハ花さくおごるをまつく祝せるに似たる源花の町の賑ひも実に櫛の歯をひく車もしらぬ人力もあれ近く築地煉瓦造の大厦ハ雲にそびえ散髪には

色あぶらの遅風を雅ゞ筒袖やふるとんとおりふ
舟あるも四季のまゝ清るゝて元ゆひの髪のゆ
ふをあらさまる古風層の日は光りとゞきこゝる
ゝを生の人も赤ゝ入ゝて送る荷物や
仕入ものの積出をさきゝ積入る松入舟ゝとき
の時宜あゝ持ふ切ゝひゝせんどゝりも同の
まゝる府下のちまゝさぞいさゝ実ふ産物町

の町名と西洋流又国みありゝや何者共ゝも
めゝぬふ撰文字と出ちゝして軍伝連集会所の
大フラク少ゝ撰ゝちと稚ゝ西洋流ふゝ濃色
ゝとゝふ表ゞりの稚ゝ大繞と油絵の額ゞ見世
書ゝ居て雅も居ゞ異ゝ表をゝ通をガラ
ス障子のゝちふ倚ゝ子みつゝつ。ターフル蓋みゝり
かゝりてゝふゝ考てゝ居るゝ此家のあるゞ竹三四

のふとうてう書れみ肥田義吉命と記せしも笑
みことまりと知らるいうさま西洋流とん
えて服い紙の用のごく鼻を掩るきりはアラ
ビヤ国ふ嚊とをあて緒豪でも為さるといふゆう
ふ白泡を食ひ出し。まづりくと為て舞る処へ。
社中とんえてはみ人。ろいを安をあつむるとう
や。いづれも面拵紀で別深のゆうふつうつき中

ふおし人相らしきを。又十俵の壱人弧名と指れ
といふ今搗臼の大家の源右衛門時代の機のある家
絡ふ金平糖のやうふちひさい紋とまんぢうぶせ
ふして黒羅紗の羽織菓子のゆうふるい菓瓶
あるを面ふ赤面せり。次ふるを名吉上書文といふ
書生奏壷絡の布ふ白の唐こ筆とうしろて
結び黒ちんざを見るひとぶらさげ紋面の四つ

目ぐらしを押へて切まさうを年賀服織縫ぐるまの女房もあき獨身すのあるゞて次あるい花車志賀といふ醫者菓紙のやうを黄八丈の古小紬時代すのと珍奇ものゝ黒羽織濃茶もあるずみ西洋流も二三流ゞ洒ゞ菓の紙ほど猪の古ろきてつゝえたく中ふ大云をくせ徽業ふるせうが入らぬで紋かゝ一盃半一盃の酒びゝりとろく

人のるゝ口をいふ癖あゝて情の病気と医薬よ病む二日酔の神まれい面倒醫者の不雲生あるべゝ次あるい御義和四郎ゝ晴ゝ出しゝやゝを悪仕立のゾボンマンテル。のゝゝくゝとあまりるゞ癖で門の車をゝゝ出をちゝもあれば死ひゞゝ奥づゝを通されて武連中のおさ紀のみつゝを人ゝあるべゝ。今一人ゝ江戸世良右釋とゝせと

る蓋絡の小紬も爰ちまぐひの仁田山のものは狂言所
ぎうい小紬きぬ織の綱絡ものあるやをといふ
新色のきいとふう幸中人のをぬとかぢる恵い藤
のやま犬ふう指丸壱人をまゝと新で爰ぢゝひ二
つこつ上壁ふつけぢあゝぢ武士帯ていぬいふ換
投してこれをく山猫右さん連中ぢゝも今は
きいらもようまいは出箱何ぢ名集を年記といふ

新工夫でも附きゝとゝ屋敷ディヤ別ふ新工夫も
えゝつきを世如ぐ何ぞひとあて歯てゆうと思ふ
みを寸一ゝ世間の形勢人気のよるあと考へぬぢ
ちゝ如ことで夫故けさ乃連中と色行て松屋町
のら道新堀ゝ高橋通りを一度ん見廻つて来ま
したゝ。いふ尾み付て名表上書又一僧も今橋壱
表と西国行ゝこぐ。叔父をつけてこるると成

あるど見いと感伏をる。去の家化とあり人こと牧
とあい西洋造りの家作をとんてもきれこりのぐ。
大うしこと見抜の百姓こと。かうりの鶏卵の安
あり西洋家とこるふ。るく人でも。去の家化の雛を
とこうこぞふ。新理四書や万品繁来で。えうぢてこで
うりの再学問ぐう。外ふ人の去仏さ人きれぞよい
半ふおつく。とうあこるゆいきこもあいゆいへぐ

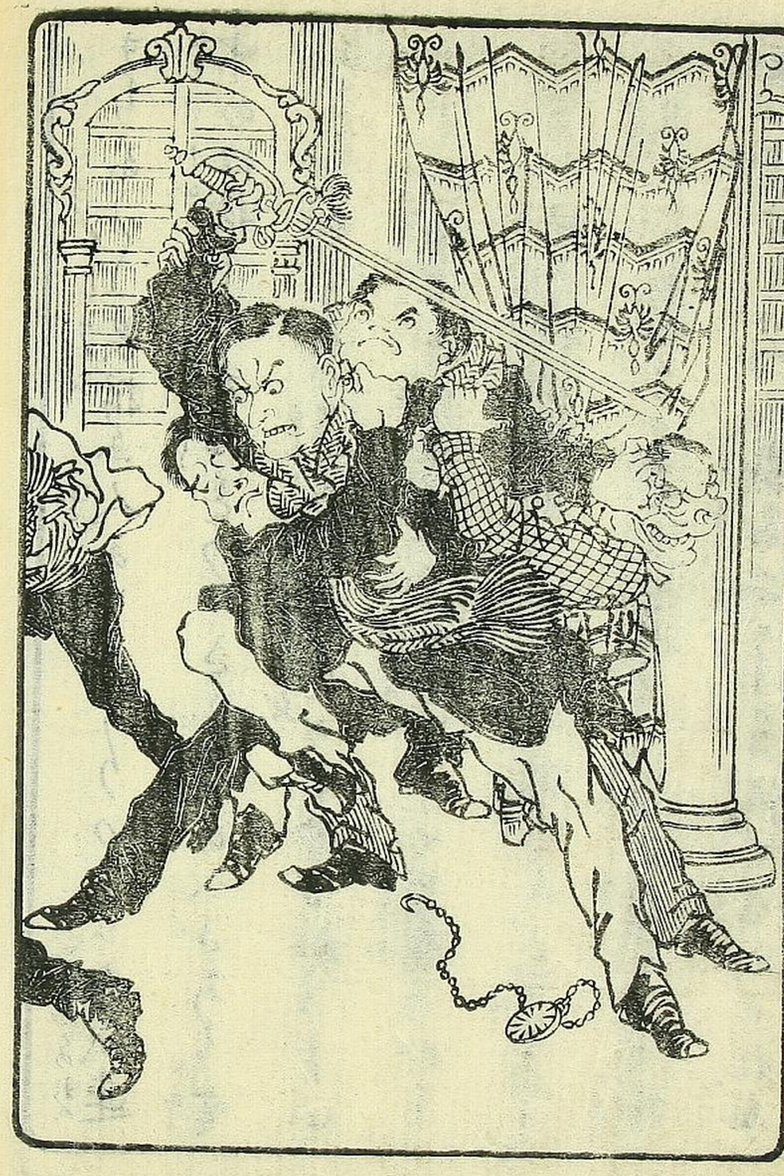
武士帰へまこ学文さんの富云ひ学ともあい。それや
どおまくひ切考あうばいやりそおあいきさこふ
ものじやが。代るの石炭油の一件。こうがり洋の山
裾とむちやくちやふ拙ちうさせと。人足煩うう法
雑角大分西源拙さん扶とさせとできあいう。
あとどかんのおせきまつうがり洋で。全体あのや
うふ油いひうう石炭油の出こうあるゆいあい畑の

拾おつてもおいるじゃハと、これ〳〵夫といそれ
てゝ忍編〳〵。きこの〳〵実成としても清水のあとう
で。温泉と見出〳〵といつく。あまでも大さう捜と
ゝみとじやアね〳〵。それじやふまつてわしを言
云いいまゝ見た。きこの〳〵あまいきあ〳〵考のかすとを
で。おまへのこゝかり渋ゝとけがちが〳〵ッウ
それゝどの格お考がかすての〳〵されがさ清水ふを

滝が有て不動が立つてあるふまつて〳〵不動が
あまバおゼ温泉があるのが〳〵ハテきこ云よあびる
温泉をゝといふこいの〳〵こをきやまゝあるし
ろくもね〳〵。きこうしもとが山でゞひ付さのがゝ
ら。大山不動も縁のね〳〵るでも学〳〵サア夫
じやふまつて。もそつとやつくこゝこゝ拍子あるま
いものでもおろふふ。そ〳〵いるゝと考こうさ〳〵

イヤ〳〵やく足切つさげまゝでムらうト。いふよ字
四郎さゝ出て元氏連中の名ひつくるゆふ今まで
とんと面つきるがあい。先罪業のきゝめふ。志
賀さんの兎の目猫足。とんときるとさるもあゝ。狸の
良吉さんの面浮貝猿ゝ。新ぐいくらも出来て八方
服猿とめくふまつて。味い池絵い人よを写。写
真まうけるゝ〳〵きゆうあどと。いふよ狸良吉オツト

まちゝ〳〵其指ふ人のをだりいふぐ元氏連
中の仕換じの大物といつ〳〵おめ〳〵ぐろう有
ふとうあるまいゆう。仙狸兎ぐまやるかゝといい
つく大坂中の豆腐へ変金をして豆腐のかを
を買ひ迎を横堀の義を借りて借ぎんぐどふ
て丈ぐうれゆうものう。皆ふ腐らして横
堀へ捨ゝといつて裁宋而うう美紙で吸出されを



の甲擡てあやまつこうへよ猿羅金を出させれ
さでそあいろ。いふよ宇四郎むっとして門のゆう
ふおすへのやうふはぎこさまふ云てそれいでものを
すじや。あきい一俥といふ而を拾ぬ押とめこれ
さあきさ言ふ能うげんよ志ふされえうさうふ
いふのそ東京の人は癖じやまあ動無しあされ。
一俥おすへがこい成へそ何しふまるのじやとお

りそしやる。能い彩工吏と看的さうといふて来
るのでそムムぬう亘ふ人の裁度だうう。いひあ
ふて居てそ果が来い。その指ふ強いやめていづま
ゆ名新面と考こうくト。いふよ一回笑ひとあ
り武こ〳〵ある程芸い西尤サア雅あと名新面いムム
ぬう赤あん〳〵オットあるくとのひこ〳〵ゆ。ゆべめく言
るで後がダブくして持る成そ外いまご望ふ袋

のにが毒うぞふある。みなさんどふじゃ〳〵うちゃ
まと有まして。そろ〳〵ちみあげてくるのと。お
つと幸龍して居る生つさ。きう〳〵嘸でも浮る
うでも。よつまあのを坂で出るのが世界の通例。夫
ゆゑ赤産の出て来ないぬうちへ。ひくて有るべ
あるぬとサ。あんまりひく業も来まい。極向
がある。よくまして出して来ひまさへ

さやう〳〵。ひとが越向があるとへめづらしいよ
くいひあさを。〳〵隠居さんよさういそれてを。
いよ〳〵まき出さるめ。私の越向といふ
をの。人皆さんの坂ふくッついて道程堀を通り
うつくの本ひつきサ。氏比芝居て大盛年八月
ざの。和昊大明神ざの。橋田猪勇ざのといふもの
と拾色で。あ〳〵しい騒向で人気とり。いつも

大入とかけて金玉も大層まくうるといふ文
句もひとつあるといふを仕組で式進中が金玉
ふあつく一ト芝居で一番あもまうけまうといふ工
夫ざ〳〵そのつもりぬぐ志て生報面もきべその
趣向い忠臣義といふ外記で十一段つづきふやる
つもり〳〵王ふんのうつと行で忠臣義が彩報面
サア〳〵そまが報面で。うちの報面い万玉忠臣義

とやるのぐお実まりの大序曲改め。蔦うちの浄
るりで〳〵赤者ありといへども食せされぞその
味ひを志らぬとハ國治まつてよ紀武士の忠も
武勇もかゝるふたゝへば星の星見えぬ欲ハ
乳まて別るゝためしとふ假名書のといふ
文句ざグットもぢつて〳〵報面ありといへども金
玉忠臣まうけもならぬとハ國治で

まつて貿易のかえるもさらんふひとくるか。
たとへば金一千遠出も今ハ開化ハ改まる時勢
をさとふ仮名書の。とくとう出して大古敷のキツ
カケで足利世義公デーベル紙の見本み洒落でピッピキ
ピイのピイ。デレツクデンのデンで出て来るかほよ
ばあが紙屋の大待で慨改とくふとろろが。シヤツ
プ改め〜黒羅紗帽子ハ丸ぼうし中打帽

子卑ぼうし。ハ祝儀帽子ハ丈くの安価
官位ハよるでかし。あるひハ紙屋ラッコ帽
子毛皮ぼうしハ支那の風其人くの好こふ
て数こ多き生中ハとふふ旨で業廃のかほ
りといふ和とシヤボンのくそう。師匠が西洋紙ハ横文
字のつけ文チヨツキのくしから出して。ほよの懐へ
いるといふ極内二服目ハ松切りであくて掾の下

うゝ這ひ出を孔をつのまへて豚切り三脚目ハ。さ
あきゝふ書きゞうへとふあと。山ゐぶふ多きゞ
うへふ熊の皮我刈みあらぬ利ともすとめんこうや
古是新ちゞつけの家此類ふぜんさくとハムト。師
直ゞ品薬をゝて判官代うゝ仕存ゝ門主存ゞ実
せぬ門ハおぞんゞてあらふ。ア二重度の別代ハえゝひ
別代でゐるちゝと出あるゝ志やるふゐ代品ゞみ

六人むゝでゝげぢくの中ゝ供ぶそゞおめくゞ
の入度ゝる中ゝふゞのゝうくとして山つく古徳
文中古姓の金言斗と歯テ。二十又ケ年又
十ケ年の公債徒出とあつてゝゝ。まゞ目ゞさ
めゐ四智でなまくゝ冠紀の人とえると山師ざ
の山気ゞ多いのと芸此家のあてゝ志ゝ。ある程
おゝ苔ゝえゝひ別代実度の中ゝ志ゝ法ゝ。

へぎり付て時好の変化も知らぬものと因術田
宮家といひまを吐ておらるゝやまゝの因術家が僕
ら二十里ゝ三十里の國のうちを天ふも地ふもあいや
うふゝふて不形仕をとるをとがあいとをろでは
維新の以布告て中絶の為ふ社中でもむをぞを
ぞあるまいうと思ふて大教舎へ出てくるると何が
國ふまりり居く奴じやふまつて作天して殺をも

あひ、あちゝの瓦形蛇へ突き当つても鼻づゝを
ぴりゝ、おちゝの猫伝抗へあゝぬをぶつけても
ぴゝ、ぴりくゝくゝと目を見して居まひ升ス蛙
拐て殺ての仲間とゝふ喧嘩場のせりふで雲
皮がサーベルを接て切りけるると師匠の帽子が
歳ゝ出ゝ豪毫て俳問と動平との出合やうい
而へ警坂俳問今い警すゝり豚鶏ゝ牛のまゝやき

懼怕

あひるのソップ。西洋風のターフル臺料理塩掏喰
てえよ。あぢといふせりふぐ四隅目い扇が合偖
紙の紙らせぐ。中良の動が百車ふ素てうけて来
る。ふ隅目ち樂一云来が書合ねで羊南焼を挽て。
ステッキとついて出くくる宝丸扇が素仕立のヅ
ボンマンテル。塩塩筆の破をさのをさして。サーベルの
鞘ーざーー〳〵オイ〳〵とお宝まりの紋切形〳〵エ〳〵

ドルでもムりません。用意めパンとおやゲ〳〵いも
ヤレ〳〵ちぶとい祝文と。サーベルの引導とおろへ
うけ出をのゲ虎ゲ〳〵ハテこいつを妙ゲ子。牧本
らテンテレックで出く〳〵るのゲ。虎の唱和いまん
ざろふ〳〵されぞそまゲ。雑子連弁ふあつろへ
て刺ハとチャルメラ〳〵こいつを妙本唱りのゲ子。
それでも死ゲ与一条清ガピッピキピイのピイと踊

010190525177

り出をだろふ〳〵これさく〳〵まぜつけ〳〵ふさん
ふ。これりゝが親向ど。そこで定め帝げ亀やぶのか
げ〳〵くれると。推の爽玉てヅドン。勘平ゞえ也め
の桶筒を持て摺付木のあくりで。さぐりより虎
みるあくでくるや。これ旅人。茶やあると懐中をさ
ぐ〳〵こ空と又十弗。虎より先へ一さんふ。ゆる赤鼠い
ろくぐんの六版目といふれ。ぐぐ。あんまり赤やべつく〳〵忠ゞき

れるちちと一点つぎてへ。ア〳〵たれぞ茶を一ぱん
持て来てくんふ

開化自慢滑稽笑抱合儀上